【イラク戦傷外科病院の現状】

国際医療救援部　中出雅治

日本赤十字社の国際活動事業の一環として、北イラクの戦傷外科病院に入り、勤務しながらの調査を命じられ、4 月 15 日から 30 日まで現地に滞在しました。長年続く紛争から未だ完全に解放されていないイラクですが、そういう国での病院とはどんなシステムで、どんなことをしているのか、その現状をご紹介します。

ドバイからアンマン（ヨルダンの首都です）経由で、バグダッドから北北西約 300km の北イラクのアルビルという都市に入りました。この地区はイラクと言ってもクルド人が住んでいる地区で、イラクの他の地域と比較すると治安は安定していると言われています。言語はクルド語、宗教はイスラム教ですが、それほど厳しい戒律を守っているわけではありません。私の目的地である、EMC 救急病院は、人口約 100 万人と言われるこの都市にある二つの救急病院のうちの一つです。この二つの救急病院は疾患によって分業制になっており、私の滞在した EMC 救急病院は熱傷と戦傷のみを扱い、もう一方の病院は交通事故やその他の救急疾患を扱います。

EMC 救急病院は 84 床で、戦傷外科と熱傷患者以外はとらないため、医師は外科医（5 名）、麻酔科医（2 名）しかおらず、看護師約 180 名、放射線技師 3 名、臨床検査技師 11 名、理学療法士 12 名、その他清掃や洗濯などは外部委託でやっています。日本と同じで卒後 2 年間の研修医（ローテーター）制度があり、この病院には 3 名のローテーターがいました。構造は一階建てで真ん中に庭のある四角い形で、ICU、男女それぞれの大部屋がいくつか（個室はない）、外来、検査室、放射線撮影室、職員食堂、医局、カンファレンスルーム、事務所などがあります。勤務時間は 8 時からで、医師の業務は手術も含めてだいたい 2 時には終わってしまい、あとはローテーターに任せて帰ってしまいますが、毎日オンコールの外科医、麻酔科医が決まっており、緊急があれば呼び出されます。看護師は 3 交替制で、各病棟に看護師長にあたるリーダーがいます。また、看護部長にあたる人もいて、この人は看護部門だけでなく、検査やレントゲン、その他事務関連の業務も全て統括している感じでした。休日はイスラムの休日である金曜日で、それ以外は土日も平日と同じです。看護師は男性看護師の方が多く、男性病棟には男性看護師しかいません。女性病棟はほとんどが女性看護師ですが、数人男性看護師もいました。ちなみに看護部長は男性です。

手術室は 3 室と、簡素な更衣室、休憩室があり、資機材は、もちろん本院のような高度な精密機器はありませんが、野戦病院という程ではなく、知っている方も少なくなったと思いますが、15-20 年くらい前の本院旧館の手術室という感じでしょうか。検査は簡単な生化学、細菌検査は可能です。放射線部門は単純撮影と手術室にポータブルの透視の機械があり、最近導入されたとのことです。CT や血管造影などが必要な場合は他の病院へ頼んでやってもらって帰ってくるという連携をしています。

搬送または自力でくる来院者は前述のように戦傷と熱傷ばかりですが、政府 8 割、地元 NGO が 2 割をカバーし、治療費は無料となっています。日本での看護にあたる部分、例えば体交や食事などの介助などは、こちらではすべて家族がします。そのために家族一名の付添いが認められており、この家族にはユニフォーム、食事も支給されます。看護師は日本よりももっと医師寄りの業務、と言えばよいでしょうか、包交、抜糸、ギプス巻き、ギプスカットなどは全て看護師がやります。また、麻酔看護師という資格があり、麻酔科医がいるという条件で、自分で麻酔をかけることができます。

近隣都市にはまだまだ治安が不安定な地域があり、そういった所から搬送されてくるもの、また紛争の後遺症とも言える不発弾や地雷などがまだ多数残っており、子供が犠牲になって運ばれてくるケース、あるいは現在は法律では禁じられているのですが、長年戦闘状態が続いていたために、一般市民が武器を自宅に持っていることがごく当たり前で、ちょっとした喧嘩で発砲したりということがあります。私の滞在中も銃創は全く珍しくなく、逆に日本では銃創なんてほとんど見たことがない、というとむこうの医師に不思議がられます。私が滞在していた間に 43 件の手術があり、そのうち 18 件に関わりましたが、夫婦げんかでお互いに銃を撃ち合ったケース、子供

が地雷を触って手と鼻を吹き飛ばされたケース、紛争地帯で胸を撃たれて開胸したケースなど、戦争の傷跡がなお強く残っていると言わざるを得ません。熱傷は、火の始末が悪いのか子供の重症熱傷が多く、また若い女性の焼身自殺も珍しくありません。

滞在中にバグダッドとバスラという私のいた位置からそれぞれ 300km くらいの 2 カ所で、死者だけで 60 名という自爆テロがあったのですが、こちらではほとんどニュースにもならず、人々の緊張が高まることもなく、またこの現在の状況にクルドの人々は不平を言うこともなく生活しています。一方で同時期日本ではタレントが夜中に酔っぱらって裸で騒いでいたのが大ニュースになっていた、というのを聞くと、不況だの何だのと言いながら外から見るとやっぱり日本は天国のように住みやすい国ということを再認識した旅でもありました。

男性病棟

手術室

ICU

中庭